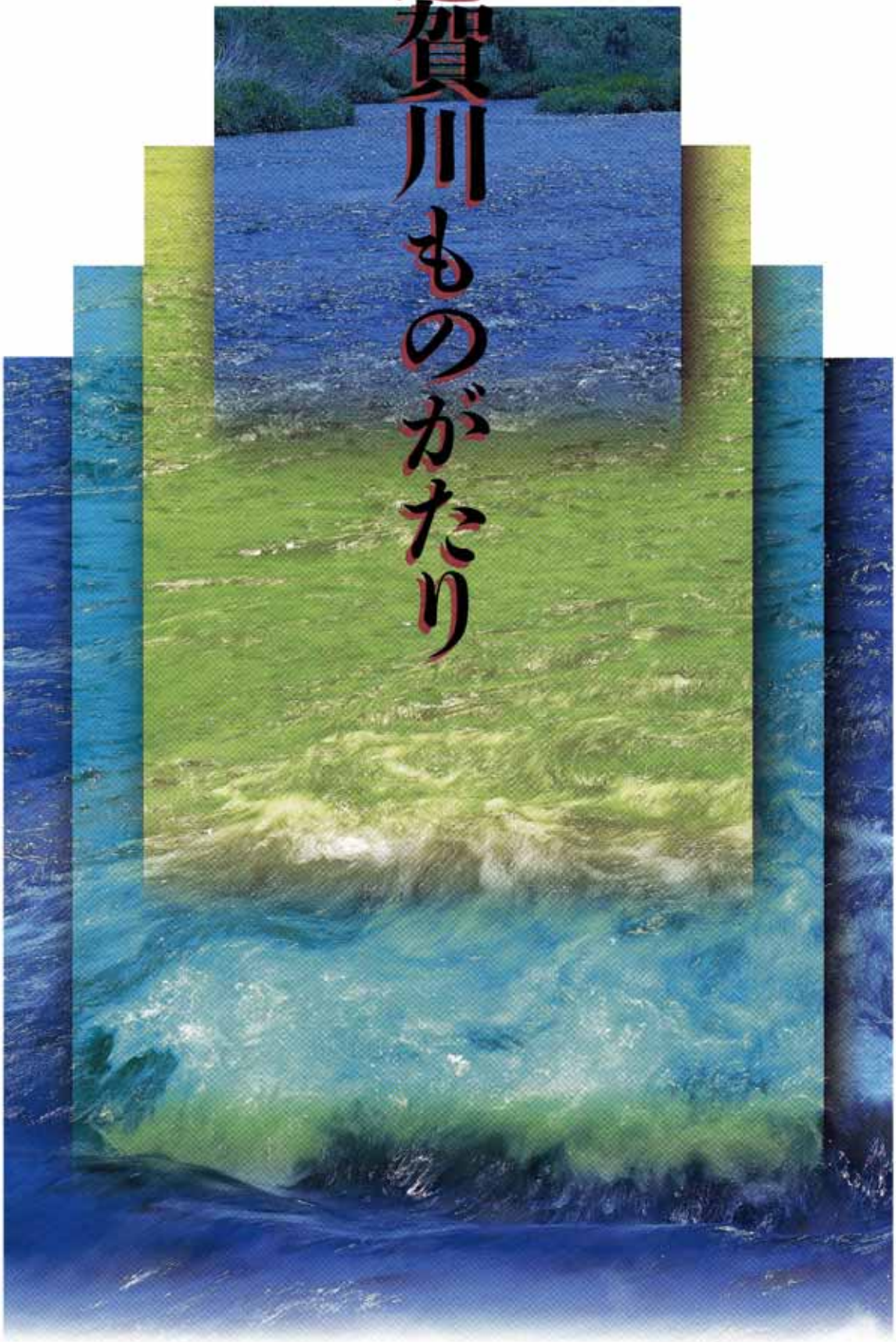
# 遠賀川ものがたり



CONTENTS


遠賀川ものがたりの刊行にあたって

遠賀川・流域の歴史と文化 ―― 6

遠賀川・近世の治水 ―― 10

遠賀川 近現代の治水 ―― 14

石炭と遠賀川 ―― 18

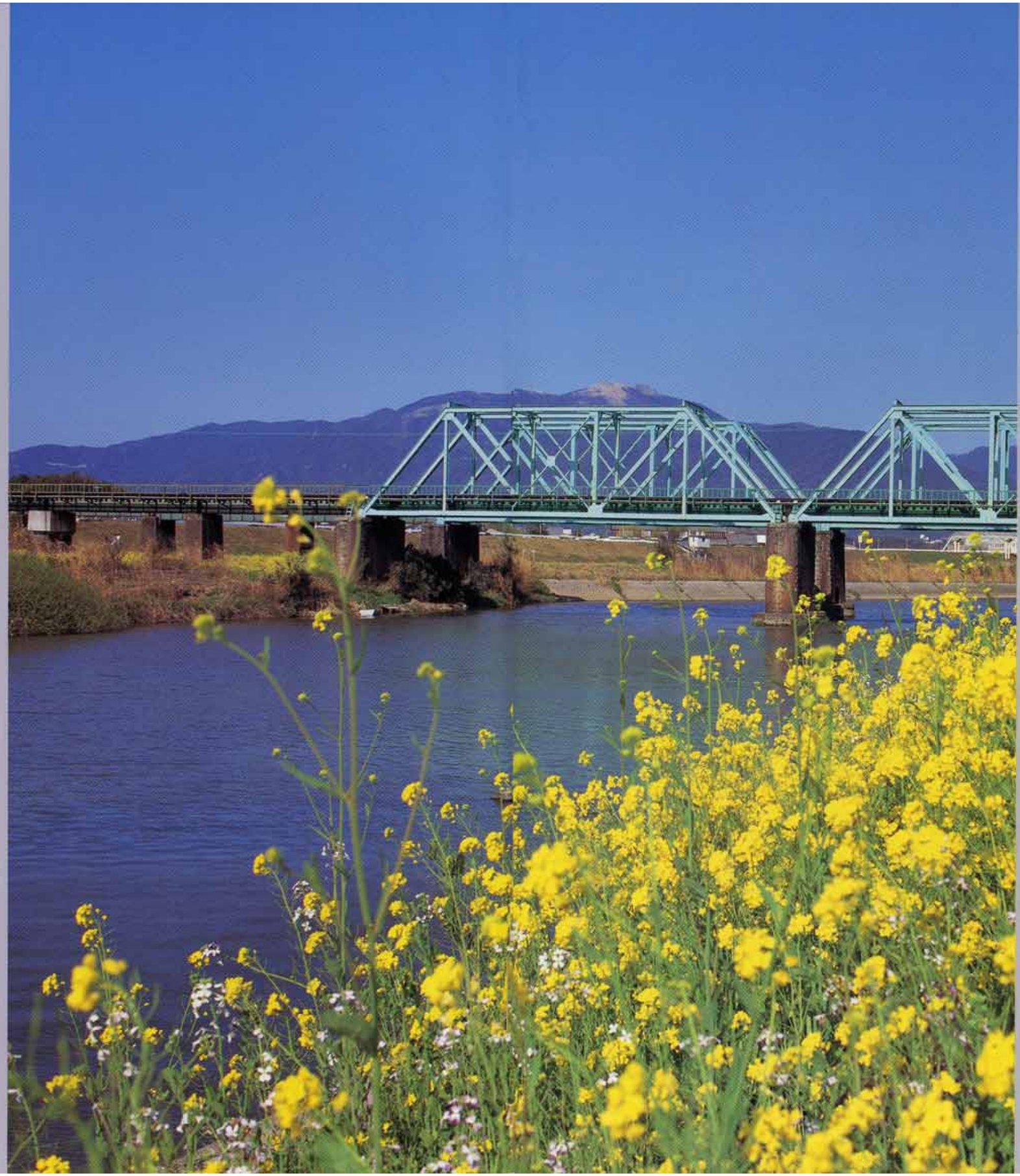
遠賀川の利水史 ―― 22

遠賀川の未来 ―― 26

資料編 ―― 30

エピローグ ―― 36

奥付

## 遠賀川ものがたりの刊行にあたって

昭和20年。敗戦の混乱のさ中に遠賀川工事事務所は生まれました。日本の復興にとって重要なエネルギー源である石炭の供給地帯を守り、石炭採掘による河川の荒廃を防ぐためでした。以来、昭和28年の大洪水や石炭採掘後の地盤沈下などの障害を克服して本年で50周年を迎えることとなりました。

ひと頃は「黒い川」と呼ばれていた川も昔の流れを取り戻し、本来の豊かな自然を活かした川づくりが進んでいる状況を見るにつけ、これまで水害や渇水といった脅威に挑んでこられた多くの方々の労苦が偲ばれます。

また、遠賀川の古代からの歴史に思いを馳せるゆとりが生まれたのも、こうした方々、先人の努力によるところが大きいと思われてなりません。

今、21世紀を目前にして先人の築いた財産である遠賀川を、ふるさとの川、心の川、先進の川として次代に引き継ぐべく大いに努力を重ねてまいりたいと思います。

本誌はそうした思いを根底に置き、遠賀川流域の歴史や文化あるいは産業や生活に至るまで広く紹介しながらひとつの物語として編纂したものです。流域の方々が川について考えるきっかけとしていただければ幸いです。


建設省九州地方建設局
遠賀川工事事務所長
菊池良介

# 〝國第一の大河なり〟
# 遠賀川流れ豊かに

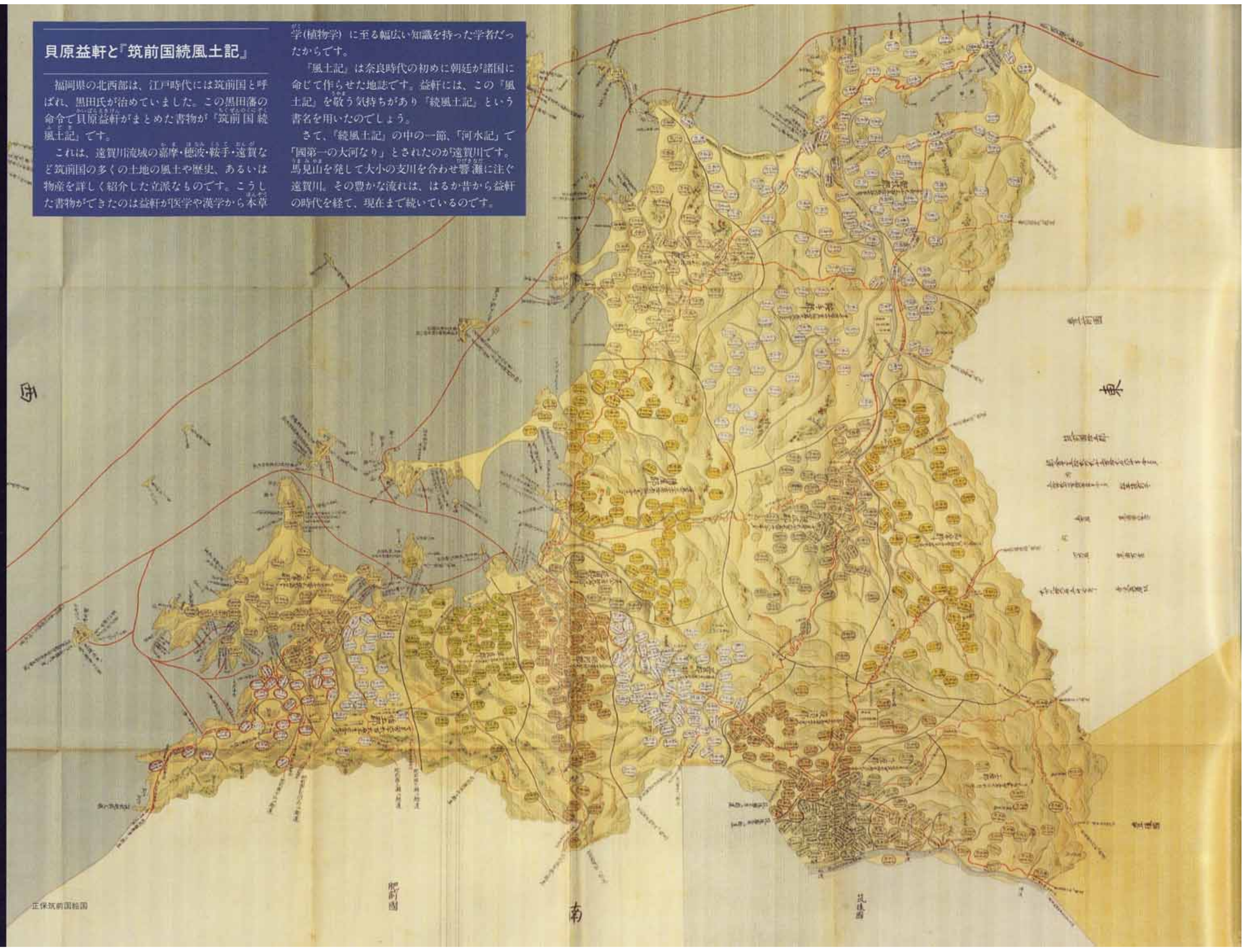
## 貝原益軒と『筑前国続風土記』

福岡県の北西部は、江戸時代には筑前国と呼ばれ、黒田氏が治めていました。この黒田藩の命令で貝原益軒がまとめた書物が『筑前国続風土記』です。

これは、遠賀川流域の嘉摩・穂波・鞍手・遠賀など筑前国の多くの土地の風土や歴史、あるいは物産を詳しく紹介した立派なものです。こうした書物ができたのは益軒が医学や漢学から本草学(植物学)に至る幅広い知識を持った学者だったからです。

『風土記』は奈良時代の初めに朝廷が諸国に命じて作らせた地誌です。益軒には、この『風土記』を敬う気持ちがあり『続風土記』という書名を用いたのでしょう。

さて、『続風土記』の中の一節、「河水記」で「國第一の大河なり」とされたのが遠賀川です。馬見山を発して大小の支川を合わせ響灘に注ぐ遠賀川。その豊かな流れは、はるか昔から益軒の時代を経て、現在まで続いているのです。

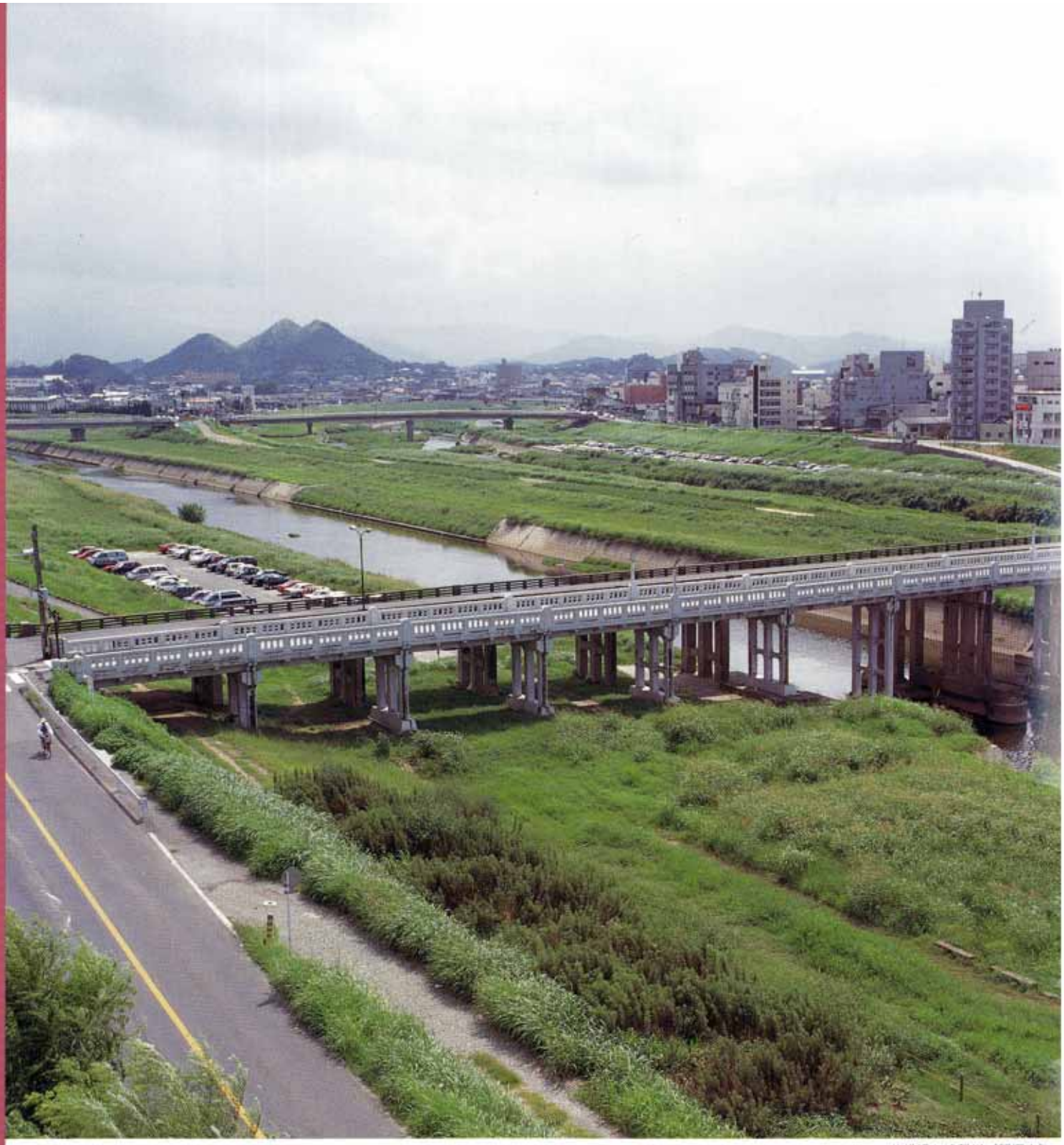


## 遠賀川流域の「物語」をたどる

「河水記」では遠賀川を「船を浮ぶる川」とも書いています。つまり多くの船が行き来できるような豊かな流れを持った川ということです。その船は「飯塚秋松」や「豊前国田川郡」までのぼりました。豊前国というのは現在の福岡県北東部のことです。飯塚は筑前国ですから遠賀川は２つの国にまたがって流れていたのです。

明治時代を迎えて流域の石炭産業が盛んになるとこの２つの国の名前を取って「筑豊」という呼び名が生まれました。それが明治18年(1885)だといいますからこの筑豊という言葉はせいぜい100年の歴史しか持っていないのです。

こうしたひとつの地名だけでなく、昔から語り継がれた言葉や物語が遠賀川流域にはたくさんあります。その中から興味深いものをひろい集めて「遠賀川ものがたり」を始めたいと思います。



芳雄橋と遠賀川（飯塚市）

## 遠賀川呼び名の記

川の呼び名というものは地域によって変わるもので、遠賀川も地域や時代によってその呼び名を変えています。

「遠賀」とは郡名であった「岡縣（おかのあがた）」の岡が変化したものです。遠賀郡が周辺の牧場の多さから御牧郡（みまきぐん）と呼ばれたときは川も御牧川と呼ばれました。芦屋町（あしやまち）の御牧橋などの名称はこの頃の名残であると言えるでしょう。

この御牧郡は寛文（かんぶん）4年（1664）に元の遠賀郡に戻すように藩より命令があり、それ以降は遠賀川と呼ばれています。これが時代による変化です。

では、地域による変化はどうでしょうか。遠賀川は上流から嘉麻川（かまがわ）、直方川（のおがたがわ）、木屋瀬川（こやのせがわ）、遠賀川と名を変えて響灘に注ぎます。

直方市を発した平成筑豊鉄道の車両が田川方面へ向けて最初の鉄橋を渡るときに「嘉麻川橋りょう」と書いてあるのを見ることができます。嘉麻というのは昔の郡の名で、そのずっと以前、大和朝廷の頃は「鎌（かま）の屯倉（みやけ）」と呼ばれたそうです。そうした伝統のある名前を記したのがこの橋なのです。

# 遠賀川・多くの物語をたたえて

## 人物でたどる流域

### 山上憶良〔660―？〕

『銀も黄金も玉も何せむに勝れる宝子にしかめやも』。筑前の国司となった山上憶良が、視察の途中立ち寄った嘉麻郡で詠んだといわれるのがこの歌、「子等を思ふ歌」です。『金銀宝石が何になろう。子供ほどの宝がこの世にあろうか』という意味で、自然よりも人間への暖かな愛情を歌うことの多かった万葉の歌人、憶良らしさが感じられる歌です。

奈良時代の郡は郡司が支配し、その役所は「郡家」と呼ばれました。嘉麻郡の郡家は現在の稲築町にあったとされ、稲築公園には「子等を思ふ歌」の歌碑が建てられて万葉の昔を偲ばせてくれます。

子等を思う歌・歌碑（稲築町）

### 足利尊氏〔1305―1358〕

足利尊氏が後醍醐天皇の新政権に反旗をひるがえしたのは建武2年（1335）のことです。尊氏は天皇方についた新田義貞を箱根で、天皇の軍を比叡山で破ったものの北畠顕家の軍に破れ九州へと敗走します。

筑前の多々良浜に着いたときは500人足らずだったという尊氏の軍勢は、しだいに勢いを取り戻しやがて京へと攻め上ります。このとき九州の拠点になったのが赤池町の興国寺あたりです。この寺は後に豊前国安国寺に定められています。安国寺とは尊氏が夢窓疎石の勧めで国ごとに建てたものです。なお、筑前の安国寺は山田市にありましたが、今は小さなお堂を残すのみです。

興国寺（赤池町）

### 飯尾宗祇〔1421―1502〕

室町時代の連歌師であった飯尾宗祇はその生涯を通じて7回の大きな旅に出ています。『筑紫道記』に記された遠賀川流域をめぐる旅もその大きな旅のひとつです。このときは中国地方の有力な大名であった大内正弘の招きで山口へやって来たのです。

山口から赤間ヶ関（下関）、若松、木屋瀬と来て、長尾で連歌の会を開き、太宰府から博多へ着いて滞在し、今度は香椎から芦屋を通って山口に戻る旅でした。

芦屋からは水路を通って洞海湾へ抜け、そのまま外海へ出て下関へ着いたことが書かれており、当時の水上交通の様子を伝えています。

芦屋方面を望む

### 豊臣秀吉〔1537―1598〕

織田信長につかえ、やがて明智光秀を破った豊臣秀吉は天下平定に向けて動きだします。九州の島津征伐に向かったのが天正15年（1587）のことでした。このとき島津氏と結んで古処山に立てこもっていたのが秋月種実です。ところが、秀吉の軍勢の多さに肝をつぶした種実は愛用の茶器を差し出して降伏します。

嘉穂郡の大隈の人々は、この秋月攻めに協力したということで秀吉から陣羽織を贈られました。この陣羽織は今、国の重要文化財に指定されて大切に保存されています。また、秋月種実がこもった古処山は遠賀川の源流がある馬見山や屏山とともに嘉穂地方の三山として知られ、秋月攻めの時の史跡が残っています。

秀吉の残した陣羽織（嘉穂町）

### 黒田長政〔1568―1623〕

黒田長政は豊臣秀吉につかえた黒田如水の長男ですが、関が原の合戦のときは徳川方に加勢しました。その見返りに筑前52万石を与えられ慶長5年（1600）に入国しました。

長政は城を構え町には福岡と名付けました。黒田家発祥の地が播磨国（兵庫県）福岡だったからです。さて、筑前が52万石というのは表向きで実際はそれより少なかったようです。長政は石高つまり米の収穫量を増やすために新田開発を思い立ちました。そこで目をつけたのが広い平野を持つ遠賀川流域です。大陸から伝わった稲作が早くから行われていたこの地の水害をなくすため、長政は治水に打ち込むことになったのです。

福岡城

## 華麗なる装飾古墳

遠賀川流域は早くから稲作が伝わった土地です。稲作と同時に大陸の文化が川をさかのぼって伝わり、多くの人々が集まって住むようになりました。

集まった人々は集落をつくります。水巻町の立屋敷遺跡もそうした集落のひとつです。この遺跡は現在、水中に没していますが、平成6年の渇水で姿を表し多くの人が見学に詰めかけました。ここで以前に発見された土器は稲を保存するために使われたもので、かなり早くから稲作が行われていたことを裏付けるものです。この土器は後に遠賀川式土器と名付けられました。その独特な文様の土器が各地で見つかったことで稲作が東の方へ伝わっていった様子を知ることができたためでした。

集落は、やがて国となり王が生まれます。そしてこの王のための大きな墓も造られました。それが古墳です。遠賀川流域には桂川町の王塚古墳や若宮町の竹原古墳など、美しい色彩で紋様を墓の内部に描いた「装飾古墳」が多く見られます。王塚古墳は動物や円・三角などの幾何学模様が細部にわたって描き込まれて、当時の文化の高さがうかがわれます。流域に残された古墳など古代文化を伝えるものに接すると、文化を伝え育んだ遠賀川という豊かな流れが想い起こされます。

王塚古墳

## 川とともにある祭

田川市魚町、風治八幡神社。5月の中頃の2日間、ここでは川渡り神幸祭が行われます。抜けるような青空のもと八幡神社を出た山車は彦山川を渡り対岸のお旅所へと渡り再び神社に帰ります。

川渡りでは近くの白鳥神社の神輿も加わって複数の山車が川の中を練り歩きます。山車や神輿のひき手の張り上げる掛け声があたりに響きわたり、山車に付けられたバレンの赤や黄、紫などの鮮やかな色彩が水に映える様を見ようと大勢の見物客が詰めかけます。

献鮭祭

この川渡り神幸祭は、遠賀川流域で行われる水にまつわる祭に共通してみられる「禊ぎ払い」という性格を持っています。古来より水には罪穢れを取り去る力があるとされていますから、川渡り神幸祭で、ひき手が水をかけ合うのも自然に禊ぎをしていることになるのです。

鮭神社

鮭神社の内部

神幸祭

また、この祭には豊作への願いが込められています。山車に付けられたバレンは130本ほどの竹にさまざまな色紙を貼ったものですが、これはたわわに実る稲穂を表したものだと言われています。

川にまつわる祭といえば嘉穂町大隈の鮭神社で行われる献鮭祭は人々と遠賀川の関わりを最もはっきりと示すものと言えるでしょう。

鮭を祭った神社は京都の大原神社などほかでも見られますが、鮭と名のつく神社はここだけです。この神社は『筑前国続風土記』にも「鮭大明神。大隈村の産霊なり」と紹介されています。「うぶすな」とは土地をしずめて守る神様という意味です。

この神社の境内には鮭塚があります。のぼってきた鮭を神の使いとして大切にして豊作を祈りこの鮭塚に埋めるのが献鮭祭です。これは記録にあるだけでも明和元年（1764）から続いている祭です。

昭和初期までは鮭の姿も見られましたが、その後石炭産業が盛んになるにつれて水も汚れ、鮭のかわりに大根をたて割りにしたものを埋めていたそうです。

それが昭和53年に水巻町で40年ぶりに鮭が発見されたことから鮭神社の氏子をはじめ、流域の多くの人々が「鮭が帰ってくるほど水がきれいになった」と言って大喜びしたそうです。

昭和61年からは各地で稚魚の放流が続けられ、鮭が遠賀川へ帰ってくるようになりました。

遠賀川の水質がさらに良くなり、魚道などが整備されることで、その数が増えることが期待されています。昔の美しい流れを取り戻しつつある遠賀川の象徴がこの鮭の遡上なのです。

## 豊かな自然と歴史

神幸祭が行われる彦山川をさかのぼり田川郡から添田町に入ると北部九州で最も高い山、英彦山がそびえています。この英彦山は出羽の羽黒、紀州の熊野と並んで日本三大修験道霊場に数えられていました。

元は「日子山」と書かれていました。これは天照大神の子である天忍骨命が降臨した、つまり太陽の子が降り立ったという言い伝えがあるためです。この名が「彦山」に変わり、さらに霊元上皇から「英」の字を賜って「英彦山」となりました。彦山川と英彦山で書き方が違うのはこのためです。

鎌倉時代初めに書かれた『彦山流記』

英彦山

には「嶺に三千の仙人あり」とあり、この信仰の山が大きな力を持っていたことがわかります。

英彦山の山伏たちは秋になると英彦山を下り、福智山に登って修行し、再び英彦山に帰りました。このことは「秋の峰入り」と呼ばれたそうです。

この「峰入り」によって開かれた福智山は現在、九州国定公園としてハイキングロードなどもあり、竜王峡などの名所が多くの観光客を集めています。

福智山は国見山ともいいます。この姿の美しい山からは、響灘に注ぐ遠賀川の悠々とした流れや緑の平野を見渡すことができるからです。

福智山

ハマユウ自生地

その遠賀川の堤を季節のたびに花が彩ります。菜の花の春。コスモスの秋。鮮やかな色の連なりが心を和ませてくれます。そして夏。夏はハマユウの白。芦屋町の海辺に咲くこの花も遠賀川の花です

遠賀川流域には、歴史を伝える山や時を越えて流れる川、そして肥沃な平野が織りなす豊かな自然が横たわり、その中で多くの人が暮らしています。

堀川普請絵図・筑紫遺愛集より

## 堀川と黒田長政

「土地ひきく（低く）大河流れて水災多し」。これは『筑前国続風土記』に書かれた遠賀川の特徴です。

海と中流部を比べても高さにそれほど差がない土地に遠賀川という「大河」が流れ、少し雨が降るとすぐ水害になってしまう、という意味です。

こうした遠賀川流域を豊かな穀倉地帯に変えようとしたのが黒田長政です。長政は「新しい運河を掘って遠賀川の水を洞の海（洞海湾）に導けば洪水も少なくなり、運河周辺の田にも水がいって米の収穫量も増える。船で物を運ぶにしても便利になるに違いない」と考えました。

そこで、元和７年（1621）家老の栗山大膳に中間から岩瀬、吉田、折尾を通る水路の工事を命じました。これが堀川工事の始まりです。堀川は「運河」という意味です。それがいつからか元々の名のように呼ばれるようになったのです。

# “土地ひくく大河流れて水災多し”
# 沃野をめざす川づくりのはじまり

## 堀川普請・掘削工事のてんまつ

堀川の工事は長政が亡くなり、大膳も黒田藩を去って中止されました。水路が「大膳堀」として残るのみでした。大膳は領民に慕われたらしく大膳町や大膳橋にその名を残しています。

さて「遠賀川の工事を仕上げよ」という長政の遺言が実行に移されたのが六代藩主・継高のときです。継高は櫛橋又之進に命じて一帯の調査を始めました。

問題になったのが大膳堀あたりの地質です。せっかく掘った水路が一晩のうちに元通りに埋まってしまうため、農民の間では貴船神社のたたりだ、という声もあがりました。

そこでコースを西寄りに変え「吉田の車返し」という山間を切り抜くことにしたのです。このあたりは車返しというくらいですから険しいうえに、大昔は海の底にあったという大きく固い岩盤がありました。ですから郷夫という石工が「とい切り」という専門の工法を使ったにもかかわらず工事は難航しました。

1間（約1.81メートル）掘り進むと何本もノミが駄目になった、という話が伝えられているほどです。しかし、やがて高さ20メートル、長さ156メートルに渡る水路を切り抜くことができました。今でも吉田の切り抜きでは当時のノミ跡を見ることができます。

大正期の中間の唐戸

現在の中間の唐戸

吉田の切り抜き

こうして水路はできあがり、遠賀川の水を堀川へ引こうとしたのですが、唐戸（水門）が洪水の時の水圧に耐えられないものであったので決壊して、かえって被害が広がってしまいます。

藩では対策として、堀川工事の監督をしていた一田久作を備前国（岡山県）に行かせました。久作は吉井川にある優れた唐戸を図面に写し取って帰国し立派な唐戸を造りました。それが中間の唐戸です。二重の扉を持つ頑丈なものでした

久作はこの功績により堀川の通船料を管理する「永代堀川受持庄屋役」に任命されました。通船料は吉田の河守神社にかかる橋の上から船にひしゃくを差し出して受け取ったということです。

河守神社

堀川の完成は通船や灌漑で一帯に大きな利益をもたらしました。しかし、さらに通水量を増やすために東井出と西井出という2つの堰を造ったために川上の村々は水はけの悪さに悩まされました。

このため2つの堰を取り除き、新しい水路と唐戸を上流部へ造る工事が行われました。こうしてできあがったのが寿命の唐戸です。この唐戸の完成で堀川は完全な姿になります。文化元年（1804）のことで、長政が堀川を計画してから実に180年あまりが過ぎていました。

## 喜太郎土手のはなし
## 河道変遷史

遠賀川を下って芦屋の河口に近づくと川幅が広く、流れは真っ直ぐなのが印象的です。しかし、黒田長政が筑前国を与えられた江戸初期には遠賀川は、いくつにも分かれ、曲がりくねった暴れ川だったのです（図A参照）。

長政は鞍手郡南良津（小竹町）から河口までの大改修を計画しました。新しく水路を掘り、堤を築き、川底も浚う工事は寛永５年（1628）に完成しました。二代藩主忠之の時で15年の歳月をかけたことになります。この工事によって西川筋に流れこんでいた遠賀川の本流は広渡と立屋敷の間のほぼ真っ直ぐな流れに改められたのです。

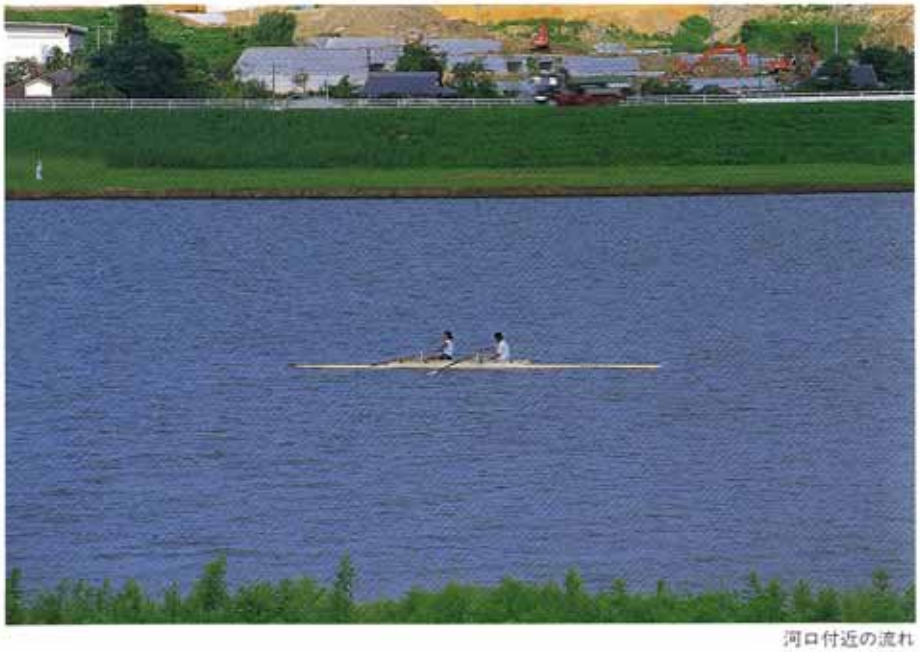
しかし、下流部は複雑な流路のままでした（図B参照）。

本流は古賀村で大きく東に曲がり、浅川村で分かれて芦屋湾と洞海湾に向けて注いでいます（B―①）。

本流と猪熊村の間にも流れがあって芦屋湾に注いでいます（B―②）。

寛永５年に掘られた荒水吐という排水路があります（B―③）。

こうした状態では洪水のときの水はけが悪く、一帯の人々は大変悩まされていたのです。



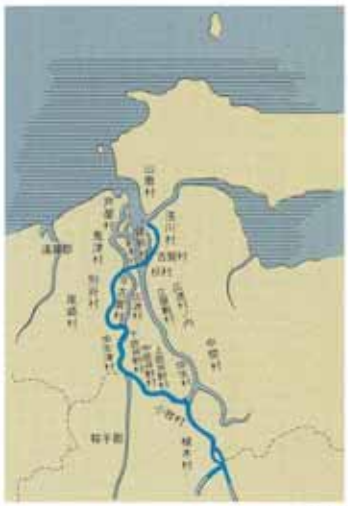
河口付近の流れ

立屋敷村の庄屋、入江喜太郎はこれを何とか解決したいと考えました。古賀村のところで大土手を築いて本流を締め切ったうえで、先ほどの荒水吐を本流にしようとするものでした。

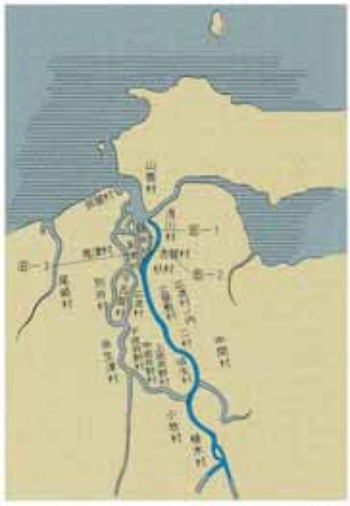
この計画の請願を受けた郡代・中山甚六は厳しく覚悟のほどをただしました。これに対し喜太郎は「甚六様に御難儀に成りそうらえば、恐れながら一命差し上ぐべく申し上げそうろう」と答えています。失敗して代官様に迷惑がかかるようなら命を差し上げます、というのです。

この喜太郎の命を賭けた大工事は大成功に終わります。延享元年（1744）のことで、この工事は「延享の治水」と呼ばれました。また、喜太郎の築いた土手は喜太郎土手とか首土手とか呼ばれたということです。

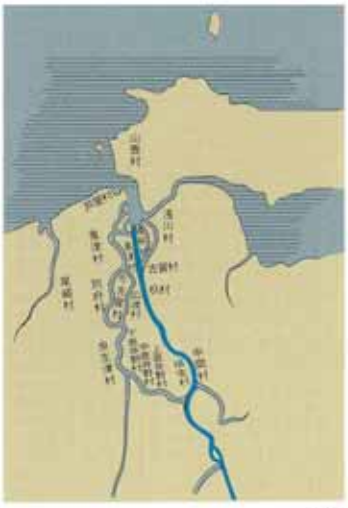
こうして遠賀川はほぼ現在の流路に近いかたちになったのです（図C参照）。長い時間をかけた人間の努力は大きな川の流れさえ変えるのだということを遠賀川の真っ直ぐな流れは思い起こさせてくれるようです。



図A



図B



図C

## 石高の変化

長政が行った堀川の開削や改修、また延享の治水によって、水害は減少し灌漑用水が行き届いたことから新しく開いた土地が増え、流域の米の収穫量はしだいに増加しました。表は遠賀町域の村々の石高の推移を追ったものですが、天正年間と元禄５年を比較すると４倍にも増加していることがわかります。

堀川沿いの地域はどうでしょうか。このあたりは、灌漑用の池が多かったのですが堀川ができてからはそういう池も田に転用しています。それに新開地を加えると収穫量はかなり増加しています。

伊佐座村を例に取ると、堀川ができる前の元禄14年（1701）に62石であった石高が、堀川通水後の天保５年（1834）には531石と約８倍になっていることがわかります。

洪水と闘い沃野をめざした長政の思いは江戸時代の終わりになって実ったと言えるでしょう。そして今も生きつづけているのです。

遠賀町域の村々の石高推移表

| | 天正年間（1573～1592） | 慶長10年（1605） | 元禄５年（1692） |
|---|---|---|---|
| 鬼　津 | 779 | 2018 | 2375 |
| 尾　崎 | | | 1204 |
| 若　松 | | 44 | 818 |
| 別　府 | 645 | 820 | 1473 |
| 鳴　津 | 550 | 881 | 801 |
| 小島掛 | | | 262 |
| 今古賀 | | | 668 |
| 広　渡 | 252 | 857 | 1145 |
| 虫生津 | | 388 | 622 |
| 下底井野 | 865 | 863 | 1017 |
| 木　守 | | | 958 |
| | a 3091 | b 5871 | c 11343 |

b／a＝1.9　c／a＝3.6

「遠賀川流域誌探訪」より

## 舟運の隆盛

遠賀川や堀川の改修は流域の石高を増加させたばかりでなく、船で物資を運ぶ舟運も発展させました。

堀川では、年貢米や流域でとれる石炭が運ばれました。また、ロウソクの原料であるハゼの実や材木なども積んで多くの船が行き交い、天保13年（1842）には通船数が9648艘を数えました。

遠賀川では石炭はもちろんのこと、伊万里焼も運ばれて芦屋で中継され各地に運ばれました。芦屋の商人は伊万里焼を筑前焼と言い換えて、東北地方などに出向いて売り歩き「芦屋旅行商人」と呼ばれました。

芦屋は、この伊万里焼などの商品を扱い、黒田藩の石炭会所があったことからしだいに豊かになり「芦屋千軒」と呼ばれるほどの賑わいを見せたそうです。

舟運には水深の浅い遠賀川に合わせて川艜という底の浅い船が使われました。この船は「五平太船」とも呼ばれました。芦屋町の歴史民俗資料館に保存されている川艜は船ダンスや水がめ、かまどを備えたもので、川と人の暮らしとの深い関わりを偲ばせてくれます。

芦屋の町並み

石炭や米を運ぶ川艜

保存されている川艜

筑前焼として売られた伊万里焼

昭和28年６月洪水で決壊した植木堤防

## 海のごとく 昭和28年の大洪水

古代の遠賀川流域は深い入江を持つ広大な湾でした。人々は海のそばで暮らし各地に貝塚を残しました。その貝塚を線で結ぶと、古代の海であったところが浮かび上がってきます。それによれば、現在の直方市の頓野（とんの）あたりまでは海だったようです。

昭和28年６月26日、前夜までの豪雨で直方市植木（うえき）の中之江堤防は決壊し、黒く濁った水がたちまち田畑を飲み込んでいきました。

このとき濁水のために取り残された人が米軍のヘリコプターによって救出されましたが、見下ろした遠賀川流域は古代の遠賀湾そのものであったといいます。

当時、遠賀川工事事務所に勤めていた桃田武（ももたたけし）さんの証言を紹介しましょう。

「堤防が切れる前に車が１台通ったですよ。運転手さんが"(堤防の) 裏から水が出よるですよ"って教えたわけですね。私ら２人で巡回しよったきね。それで行ったときは切れちょったです。消防団も来ておったが、土のうに土を詰める間もなく避難命令を出した。

その日は雨は降らんやったけど、前日からの雨で堤防の上から手が洗われよった。それほど水がきよったですよ。

決壊地点で桃田武さん

上流からも下流からも水が入って、１時間で川の水が１m減ったとです。それで、あそこらの家も２mくらい浸かってしもうて。幸い決壊地点の近くは田んぼが広がっていて家は離れちょったき流されんやった。

"堤防はきれん"と地元の人も言うとったが切れて…。大変な洪水やったとですが懸命に修復作業を続けて10日ほどかかったとです。確か炭鉱の人たちが応援に来てもろたとですばい。夜もヘッドライトをつけて作業してくれた。

今は川幅も広がって、堤防も丈夫になって水のひきも早い。昔と違う。でも、"屋敷は高うして住んでもらわにゃいかんし、もっと丈夫な堤防をつくってもらいたい"。こう思うとです」。

# 時を越えていま
# 受け継がれる川づくりの心

## 洪水・水の災いの記録

昭和28年の大洪水は死者20人、流出や全壊を含めた家屋の被害が39744戸という大きな被害を遠賀川流域に与えました。

遠賀川は江戸時代から最近まで幾度となく洪水を引き起こし、そのたびに流域に大きな被害を与えています。

江戸時代の例として嘉永（かえい）3年（1850）の大洪水を挙げてみましょう。中間の明願寺の「記録」には「嘉永三年六月大洪水、（中略）沿川の村落は多大の被害」と記されています。

昭和28年と同じく6月に洪水が起こっていますが、これは遠賀川の洪水の特徴ともいえるもので大半が梅雨時に起こります。「一野面（いちのよ）、二新延（にのよ）、三南良津（さんならづ）」は遠賀川流域の水害常習地帯を指した言葉ですが、こうした地域が「水に浸からないと梅雨があけない」という言葉があるほどです。

堀川もこの嘉永の洪水の被害を受けました。土手が決壊したり、多量の土砂が流れ込んだりしたのです。この土砂を取り除く作業には2600人もの人が作業にあたったそうです。

さて、洪水は明治になっても繰り返し発生しました。そして江戸時代にはなかった被害を流域に与えました。炭鉱と石炭を運ぶ鉄道の被害です。

明治38年（1905）の洪水では、この炭鉱と鉄道に大きな被害が出ました。そこで流域の石炭産業を守るということで国による治水工事が行われることになったのです。これが第一期改修工事と呼ばれるものです。

昭和28年遠賀村の被害

昭和28年遠賀村の被害

昭和55年直方市の被害

●主要洪水一覧表

| 年・月 | 連続雨量（直方観測所） | 最高水位（日ノ出橋観測所） | 被害状況 |
|---|---|---|---|
| 明治22年7月 | — | 1丈7尺 | 梅雨前線による未曾有の豪雨のため流域の被害は甚大。堤防決壊2296ケ所。建物流出損116戸。浸水箇所40村2000戸。橋梁破損412ケ所。井堰破損1299ケ所。道路破壊741ケ所。その他、耕地、樹林、米穀などの流出甚敗。 |
| 明治38年7月 | 258mm | 6.51m | 梅雨前線による前代未聞の大洪水。直方全町家屋浸水。筑豊線不通。炭鉱被害甚大。死者12人。堤防決壊箇所257ケ所。建物流出倒壊163戸。浸水家屋21000以上。橋梁流出141。道路破壊136ケ所。被害総額400万円。この洪水が契機となり第一期改修工事が始まる。 |
| 昭和16年6月 | 629mm | 7.74m | 25日から29日にかけて降り続いた雨が各地に被害を与えた。増水氾濫により堤防・道路・橋梁・家屋・耕地が被害を受け、被害総額は1182万円となった。 |
| 昭和28年6月 | 571mm | 7.49m | 戦後最大の洪水。死者20人。行方不明211名。建物流出倒壊953戸。浸水家屋38791戸。道路破壊55ケ所。被害総額44億円。水田の流出及び冠水1061ha。植木の中ノ江堤防などの決壊により第二期改修工事の見直しをする契機となった。 |
| 昭和47年7月 | 366mm | 6.45m | 梅雨前線の停滞により穂波川で破堤したほか、破堤・指定水位の超過が続き、道路冠水、浸水を中心に飯塚市が大きな被害を受けた。死者1名。住居倒壊34戸。浸水家屋5826戸。橋梁流出23ケ所。道路被害349ケ所。 |
| 昭和54年6月 | 499mm | 7.40m | 昭和28年以来の大洪水により流域一帯に被害が広がった。住居倒壊101戸。浸水家屋6163戸。橋梁流出15ケ所。道路被害372ケ所。死者1名。改修工事の効果が現れ、破堤による被害はなかった。 |
| 昭和60年6月 | 389mm | 7.20m | 梅雨前線による大雨で6月25日に警戒水位を突破、一時小康状態となったが、再び27日から警戒水位を突破し各地に被害が広がった。死者1名。倒壊家屋42戸。浸水家屋661戸。橋梁流出2ケ所。道路被害266ケ所。水田の流出及び冠水947ha。 |
| 平成7年7月 | 307mm | 6.90m | 床上浸水40戸。床下浸水369戸。河川被害26ケ所。道路被害307ケ所。水田の流出及び冠水1348ha。 |

## 明治から大正へ 第一期改修工事

飯塚市。江戸時代には長崎街道に沿った筑前六宿に数えられる宿場町として、明治になってからは石炭産業の拠点として栄えた街です。

また、穂波川と遠賀川が合流する街でもあります。穂波川も遠賀川も新しい流れです。穂波川は飯塚川といい現在の飯塚緑道公園のところを流れていました。また、遠賀川も今とは違い飯塚麻生病院から飯塚第一中学校のほうへ流れていました。

この２つの川の流れを変えたのが第一期改修工事なのです。この工事に期待された効果は大きくいって２つあります。ひとつは炭鉱周辺の浸水を無くすことで石炭が大量に取れるようにすること、もうひとつは蛇行した川を改修し、有効に土地を利用することです

川をなるべく真っ直ぐに、そして洪水が流れやすいように掘り広げ、出てきた土で堤防を築くという工事が行われました。エキスカベーターという掘削機や土砂を運ぶ蒸気機関車などの大型機械が使われたことと、岩盤地帯を掘るときにダイナマイトが使われたこともあって工事は順調に進みました。

硬い岩盤をノミで掘り進んだ「吉田の切り抜き」のときの工事と比べると何という違いでしょう。明治以降、日本の国が西洋の技術を大変な勢いで吸収していったということが、こんなところからもわかります。

このような改修が飯塚や直方、金田や芦屋と４つの工区で行われました。工事は明治39年（1906）年から準備を始めて大正５年（1916）に一応完了しましたが、引続き追加事業を施工して、大正８年（1919）に竣工しました。これを第一期改修工事と呼んでいますが、嘉穂郡の田を全て合わせた面積を上回る土地が改修用に買い上げられるなど大規模なものでした。

第一期改修工事は遠賀川流域を水害の恐ろしさから解放しました。また、鉄道などの交通路を水害から守ることで石炭の輸送を順調にし、国全体の産業にも大きな利益を与えました。これは舟運や灌漑に大きな効果を挙げた黒田藩の改修とは違う、もうひとつ大きな価値を持つものではないでしょうか。

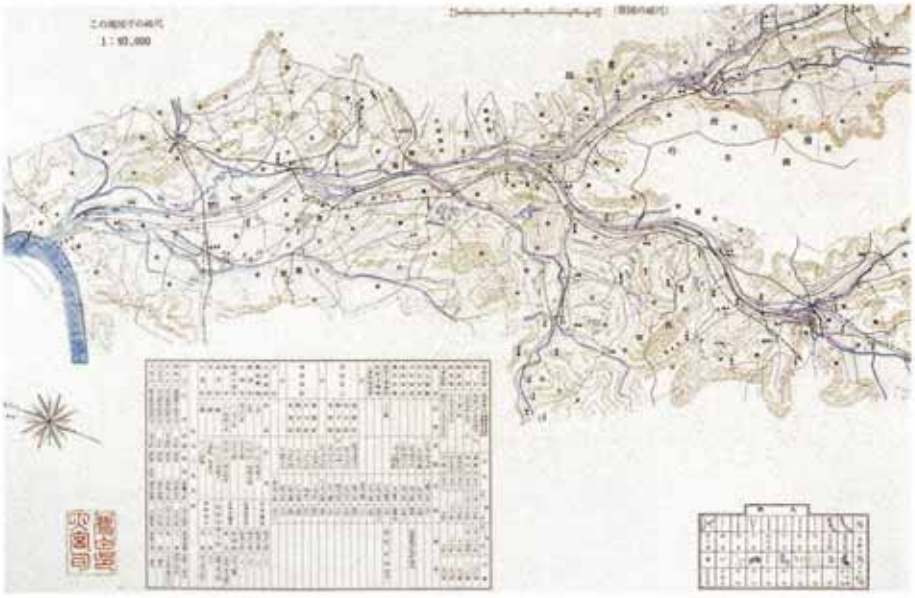
飯塚市宮町のオランダ屋敷跡と長崎街道

明治41年（1908）第一期改修工事起工式（直方市）

飯塚緑道公園

飯塚川の埋立（昭和49年）

第一期改修工事記念碑（直方市）



大正５年（1916）遠賀川改修工事竣工図

## 戦後50年・第二期改修工事から

第一期改修工事以降は遠賀川の管理は県が行っていました。しかし、昭和に入って石炭の採掘量が急激に増えたことで地盤沈下が続き堤防や護岸が破壊されました。その結果、遠賀川は再び水害に見舞われるようになりました。そこで、昭和20年から国による改修工事が再開されることになったのです。

この第二期改修工事は初めは第一期改修工事でできた施設の補修が主なものでした。しかし、遠賀川全体が石炭採掘で荒れ果てており昭和28年の大洪水なども発生したことからさらに新しい計画が立てられました。

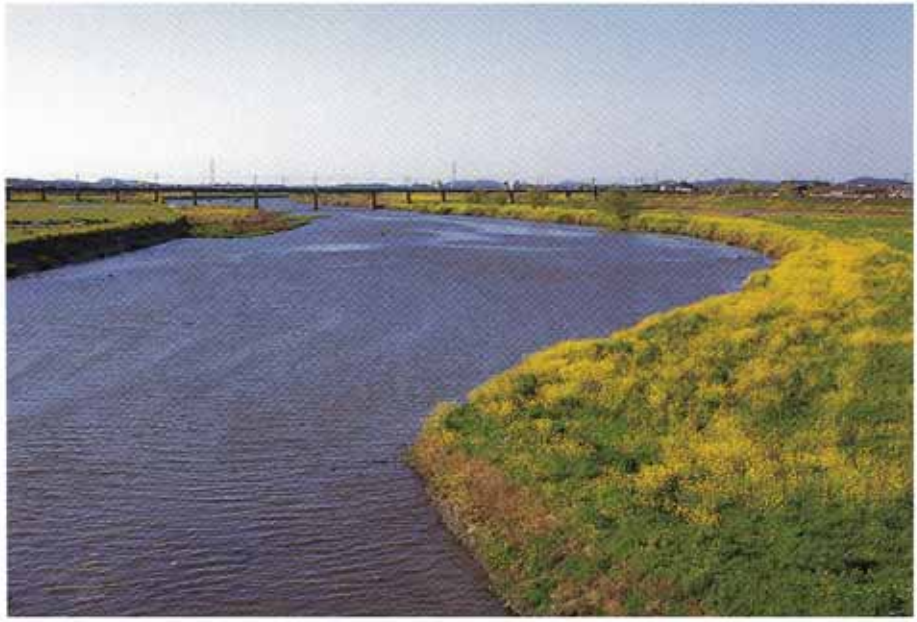
この計画に基づく改修例として飯塚市の碇川（いかりがわ）の放水路を挙げてみましょう。これは碇川から穂波川に注ぐ新しい水路を開削したもので、昭和31年に完成しました。この放水路ができたことで、少し雨が降ると洪水になるという状態が続いていた菰田（こもだ）などの地域は水害から逃れることができたのです。今では、この放水路が碇川と呼ばれています。

こうした改修が続いたあと、昭和49年には流域の都市化と新しい産業の発展による開発ラッシュや石炭産業が残した地盤沈下をはじめとする鉱害などの問題を解決するために新たな改修計画が立てられました。

碇川

それから現在まで、堤防を造る、洪水の流れを妨げている古い橋や堰を改築する、排水機場（はいすいきじょう）（大雨で水門が閉まったあと、行き場のなくなる支川の水を本川へ排水する施設）を造る、などさまざまな工事が続けられています。このため昭和28年のときのような大きな被害は出なくなっています。しかし遠賀川流域を再び「海」にしない、という心構えは持ち続け、備えを固めていくことは忘れないでいたいものです。

最近ではこのような治水工事に加えて多自然型川づくりといって、自然と生物の環境に配慮した工事が行われて安全で豊かな川づくりが進んでいるのです。

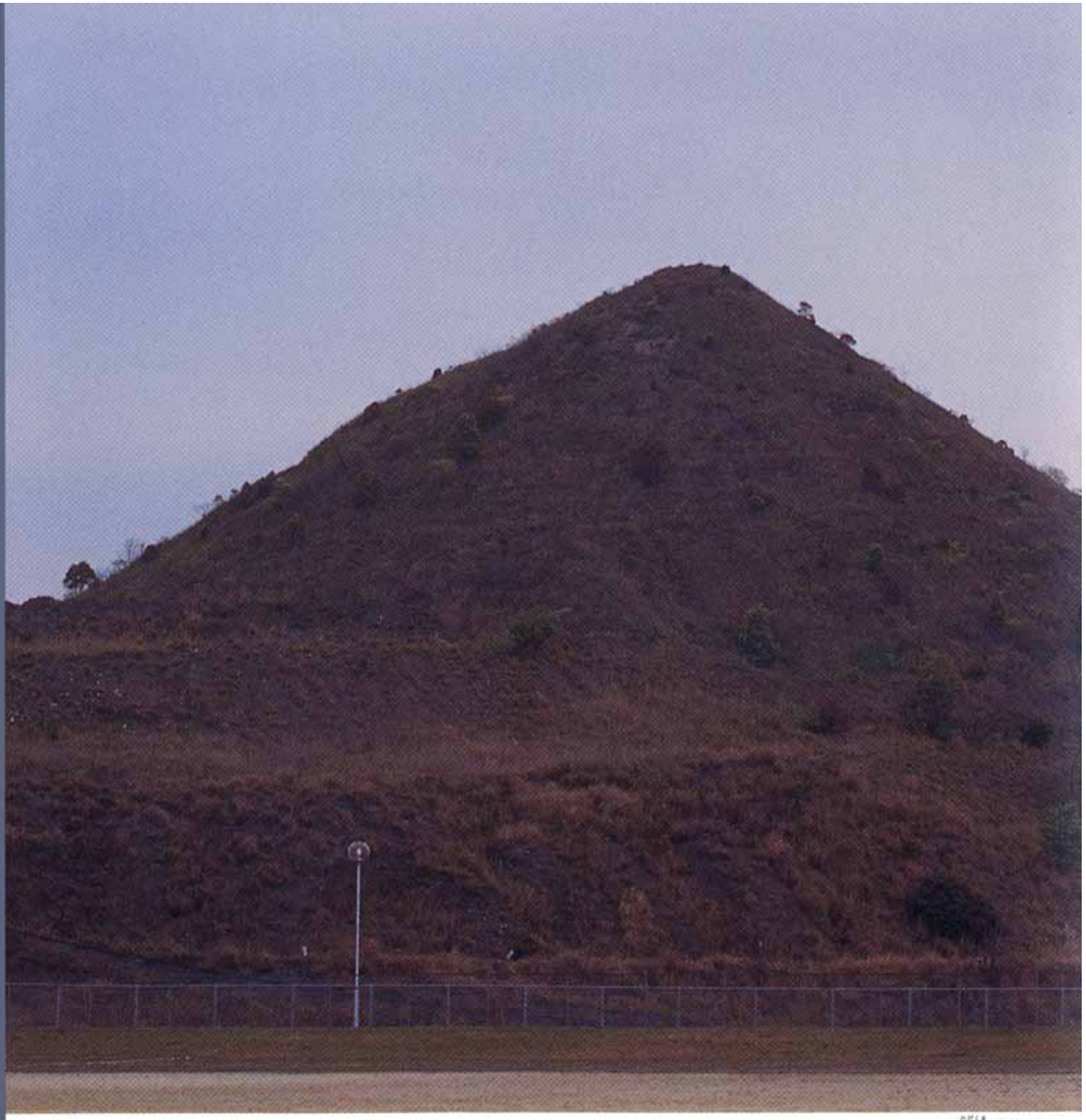


庄司川排水機場（施工中）

多自然型川づくり（施工中）

庄司川排水機場（施工後）

多自然型川づくり（施工後）



忠隈のボタ山

## 燃え石
## 自然造化の助け

「燃え石」とは遠賀川流域の人々が石炭を指して言った言葉です。『筑前国続風土記』にも、煙が多くて臭いもきついが、風呂を炊く薪のかわりにもなって便利である、これは「自然造化の助け」である、と書かれています。神様の贈り物だ、というわけです。

燃え石あるいは焚石と呼ばれた石炭はこのように家庭用の燃料として使われていましたが、しだいに塩田用や漁船のかがり火用として藩外にも大量に売られるようになりました。堀川ができる前の主な積み出し港であった芦屋では「あしや炭」という商品名も生まれたほどです。

やがて、黒田藩では石炭販売によって財政を建て直すことを思い立ち「仕組」という専売制度を作りました。この制度に沿って「焚石会所」を芦屋と若松に設けて取り締まりも行いました。

それでも年収入は生白蠟の20万両に対して、千両ということで財政を建て直すまでには至りませんでした。これは石炭の採掘技術が未熟だったためです。大量の石炭を採掘する技術の登場は明治を待たねばならなかったのです。

# 燃え石・遠賀・黒い川
# ときに人を支え人を悩ませた石炭と川の歴史

## 石炭が支えたもの

遠賀川流域は鉄道網が非常に発達しています。何か駅に着くたびに新しく路線が分かれていくような印象がありますが、この鉄道網を作りあげたのが最盛期には256もあったという炭鉱群です。

炭鉱は石炭を掘り出したらすぐに船で運べるように、川の近くにあるのが普通でした。石炭は川艜という船に積み込まれ遠賀川や堀川を通って積み出し港である若松へ運ばれていきました。明治32年（1899）には13万もの川艜が堀川を通ったということです。

しかし、この舟運の勢いを脅かしたのが鉄道です。鉄道会社は流域にあった炭鉱はもちろん、新しい炭鉱ができるたびに路線を伸ばして、舟運業者との競争に勝ち抜いていきました。記録にあるだけでも11世紀から続いていた舟運は昭和13年を最後に無くなってしまいます。こうして遠賀川流域には他に見られないような鉄道網ができあがったのです。

現在、平成筑豊鉄道として田川市と直方市を結んでいる路線もこの鉄道網のひとつです。直方駅を出たワンマン列車は遠賀川の鉄橋を渡り、左手に福智山を見ながら彦山川に沿って田川へ向かいます。途中、田川後藤寺（ごとうじ）へ向かう路線を見送って着くのが田川伊田（いた）駅です。駅からすぐのところに神幸祭で知られる風治八幡神社があります。

この神社とは反対方向へ、線路の下の小さなトンネルを抜けると石炭記念公園が見えてきます。これは三井田川炭鉱の跡地を整備したもので、当時のままの煙突や坑口の設備が保存され、石炭資料館によって流域の石炭産業の歴史にも触れることができます。

明治になって流域には中央の資本によるものから、直方の貝島、飯塚の麻生あるいは安川といった地元の企業が興したものまで多くの炭鉱が生まれました。これには江戸期に藩の管理下にあった炭鉱が鉱山解放という明治政府の方針によって自由に採掘できるようになった、という背景があります。

こうした多くの炭鉱の石炭をエネルギー源として明治34年（1901）に建設されたのが八幡（やはた）製鉄所です。それから八幡村といわれていた一帯は重化学工業地帯へと変わり、現在の北九州市の基礎をつくったのです。

さらに、遠賀川流域の炭鉱群は明治、大正、昭和と日本の産業をずっと支え続けました。特に、第２次世界大戦後は敗戦国・日本を復興させる原動力ともなりました。しかし、新しいエネルギーである石油の登場によってその役割を終え昭和51年には全ての炭鉱が流域から姿を消したのです。

流域では多くのボタ山が残っていますが、風化したり、削られたりして当時のままの姿をとどめてはいません。しかし、それらは地下深いところで懸命に働いた人々の苦労を偲ばせてくれる風景です。

田川市石炭資料館

最盛期の炭鉱分布図（昭和10年～15年）

石炭採掘に使用した大型機械

## 石炭産業の光と影

「大空の星座よりも燦たる一大不夜国の…その首都が即ち我等が炭都飯塚である」。これは昭和13年発行の『飯塚市郷土読本』に見られる一節です。星よりもまばゆい光を投げかける不夜の国の首都が飯塚である、という言葉は自信と誇りに満ちています。何よりも、「炭都」という言葉には石炭産業に沸く街の勢いが感じられます。

こうした勢いが大正から戦後に至るまで多くの映画館や劇場を栄えさせたのです。大正時代から登場した金春館などの映画常設館や、昭和６年にできた嘉穂劇場が大勢の客を集めて賑わいました。

嘉穂劇場は現在でも興行を行っており

金春館

多くの人が詰めかけます。明治の様式を取り入れた外観や、畳敷の座席が人気を呼んで公演のない日でも見学者が絶えません。その劇場を支えてきた伊藤栄子さんに炭都の頃の思い出についてうかがいました。

伊藤英子さん

「昭和30年頃でしたか、作曲家の古賀政男先生が有名な歌手をたくさん連れていらっしゃったんです。これは嘉穂劇場始まって以来の大入りで、もう押すな押すなで2300人は入ったですかね。

２階のお客さんも落っこちるのではないかというほどで、東京から来た芸能社の社長さんが“落っこっちゃうよ。こわれちゃうよ”って言ってたのが印象的でしたね。

当時はテレビも鮮明に映らない頃だったってこともありますけど、飯塚も石炭で活気があったんですね。それがエネルギー革命で石炭が売れなくなると閉山が続いて、他の炭鉱へ移ったり、仕事を変わったりで皆さんも芝居どころではなくなってしまって…。

でも、この流域も良くなってきましたし、ここで頑張っていると昔のお客さまが訪ねてきて“なつかしい。この劇場生きてたんですね”って言ってくださったりして。それに飛行機で来てくださるお客さまや、両花道のあるこの劇場の魅力にひかれて来る役者さんもいますから、おろそかなことはできません」。

石炭産業が無くなったということはさまざまな影響を遠賀川流域の街に与えました。仕事がなくなったというだけではなく大きな問題を炭鉱は残していきました。それが鉱害です。

嘉穂劇場

嘉穂劇場内部

石炭の採掘による地盤の沈下をはじめとして微粉炭という石炭の粉による水の汚れを引き起こしました。地盤沈下とは、家や堤防や田畑が沈んでしまうことです。家が沈むと襖などが開かなくなったり壊れたりします。田でも沈んで池になってしまうものがありました。

水の汚れは昭和の初期から炭鉱で「水洗法」といって石炭と燃えない石であるボタを水の浮力により選別する方法が採られたことから始まったものです。これによって、水洗後の水が流れ込む遠賀川は「黒い川、ぜんざい川」などと呼ばれるようになりました。黒い水は水道には使えないうえに、田に入れると稲が育ちませんから流域の人々は大変苦労したのです。

## 鉱害復旧事業
## よみがえる川

地盤沈下した土地や建物を元通りにすることを主な目的にしたのが鉱害復旧事業です。国や県の負担に加えて炭鉱の採掘権を持った会社が費用を負担する法律（特別鉱害復旧臨時措置法）が昭和25年に公布されたことで国の事業として本格的な取組みが始まり、さまざまな復旧事業が行われました。

沈下した田を回復すること。これは表面の土を取り除いて新しい土を入れるという方法で行われます。そうした田は土の色からか「赤田（あかた）」と呼ばれました。この他、水路や堰、溜め池などの回復事業が各地で行われました。

堤防や樋管（ひかん）などを復旧すること。樋管は小さな水門です。ともに洪水から街を守るために大切な川の施設ですから念入りに修復されます。この事業は遠賀川、穂波川、彦山川、犬鳴川（いぬなきがわ）をはじめ、いたるところで行われました。

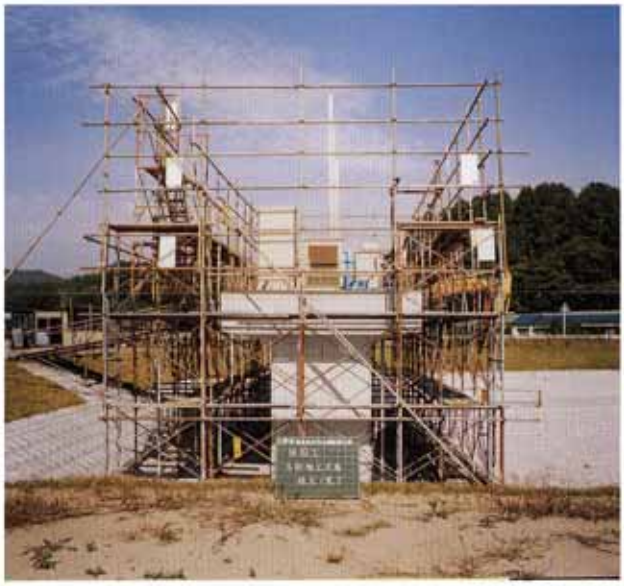
微粉炭を取り除くこと。これは川底に溜まって水の流れを悪くし洪水の原因になるだけでなく、鉱毒があるので全て取り除いてしまいます。この事業は特に西川や黒川で行われました。

このような事業が長く続けられたこともあって、流域の川は石炭採掘以前の健やかで美しい流れを取り戻しつつあります。黒い川だった面影さえありません。

鉄道網ができる前に輸送の花形であった川船。その船には水がめも積まれていましたが、船頭さんは水がなくなると遠賀川から直接汲んで使ったそうです。すくった水が手のひらで、どこまでも透き通って見える。そんな水の美しさを今、遠賀川は取り戻しつつあるのです。

鉱害復旧地

微粉炭の浚渫



南良津水門の改築

昭和53年の渇水（西日本新聞社提供）

## 昭和53年の大渇水

昭和53年に北部九州を襲った渇水は、それまでにない規模のものでした。これは52年の夏からの少雨傾向が原因です。いつもの年の半分しか雨が降らない月がほとんどだったのです。

この渇水は福岡市のような大都市はもちろん、水源を遠賀川に求める北九州市や香春町、田川市、水巻町などにも大きな影響を与えました。北九州市では６月８日からの給水制限が12月11日まで続き、最も長い場合は15時間の給水制限さえ行われました。

１日のうち15時間、蛇口から一滴の水も出ないというのは大変なことです。食事の用意や洗濯、お風呂と考えてみると水は暮らしに欠かせない大切なものだということがよくわかります。

給水制限が287日続いたという福岡市では、その後、「節水コマ」という蛇口に取り付けて水を大切に使う器具がほぼ全家庭に行き渡ったということです。

# 大地と人をうるおすために
# 堰、水への思い新たに

## 渇水の記憶

遠賀川流域では、昔から渇水が繰り返し起こっています。平成６年の渇水も記憶に新しいところです。この時は昭和53年と違って給水車が出動するということはありませんでしたが、それでも北九州市など人口が集中する都市にとって渇水がやっかいなものであることに変わりはありません。

平成６年の渇水

しかし、遠賀川流域は遠賀川という大きな川があるために、まだ水事情はいいということができます。この水を工夫して使うことができるのですから。

江戸時代、川筋の村は渇水になると仮の堰を築いて水を田に引くことで何とか収穫することができました。しかし水を引くということは大変な負担が農民にかかるうえに水争いの種にもなりました。

嘉永６年（1853）は、やはり大変な渇水で５月23日から70日の間、まったく雨が降りませんでした。遠賀郡の中間村（現在の中間市）では、川上の感田（がんだ）などの村と仮堰の建設をめぐって、にらみ合いが続いたといいます。この対立は８月２日に雨が降ったことで終わったのですが、もう１日雨が降るのが遅れていたら大変なことになったかもしれません。中間村には雨が降った喜びを「言語（げんご）に尽くし難（がた）し」つまり言葉にできないほどであったとする記録があります。

遠賀川には100を越える堰がありますが、そのひとつひとつに農民の水への思いが込められているのです。

## ひと鍬堀とひと晩堀

「田に水を引く」ということは、流域にさまざまな物語を生みました。嘉穂町に伝わる「ひと鍬堀」の話もそのひとつです。

江戸時代、上西郷村（かみさいごう）に正人（しょうじん）という医者がおり、水不足に悩む農民のために嘉麻川の水を引こうと思い立った。そこで、黒田藩に願い出て「鍬の幅の分だけ」という約束で水路を掘りはじめる。ところが正人の作った鍬は幅が１メートルもあるものだったので立派な水路はできあがったが、正人とその家族は何者かによって殺されてしまった。村人は正人が殺された石橋を墓としてずっと守った、というものです。

今でも長田用水樋管のあたりから「正人さん」の「ひと鍬掘」は流れてその墓も石橋天神として残っています。

碓井町にも「ひと鍬堀」に似た話があります。これは「ひと晩掘」という話です。須藤さんという人が村人のために秋月藩に願い出るところまでは同じです。

藩では「ひと晩で掘るならよい」と言う。そこで、須藤さんは幅の狭い鍬を使ってひと晩で細い水路をつけてしまう。細い水路なので藩もとがめることができず村人はほめ讃えて須藤大明神として祭った、というものです。

結末が明と暗に分かれるものの、命をかけるほど大切だった水というものの重さが感じられる２つの話です。

ひと鍬堀（嘉穂町）

須藤大明神（碓井町）

●主要渇水一覧表

| 年 | 期　間 | 渇　水　概　要 |
|---|---|---|
| 明治27年 | ７月27日～８月25日 | 香春で連続無降水日数30日。川崎村や赤村で出穂不良。 |
| 昭和９年 | ６月～７月下旬 | 酷暑。田川市で水稲の植えつけ不能面積割合が40%を越す。 |
| 昭和33年 | ５月～７月 | 田川市では２時間から10時間の給水制限。香春町ではセメント工場が操業短縮。自衛隊の給水車出動。水輸送列車を運行。 |
| 昭和42年 | ５月中旬～６月中旬<br>７月中旬～10月上旬 | 飯塚市で６月８日から14年ぶりに６時間の給水制限。９月10日、田川市は自衛隊に依頼して彦山川の川底を掘る。市内1810戸の農家のうち、1200戸が水不足で悩む。 |
| 昭和53年 | ６月中旬～12月中旬 | 少雨傾向が続く。平年比の20～30%程度の降雨。福岡市では５月20日から翌年の３月まで287日の給水制限が続く。香春町、赤村、添田町、田川市、水巻町でも５月中旬から６月上旬まで給水制限。北九州市でも６月８日から12月11日まで、173日の給水制限。 |
| 平成６年 | ７月中旬～12月中旬 | 西日本を中心に全国に及んだ異常渇水により流域内の11市町村で時間断水が実施された。また、陣屋ダムの貯水率が2.8%まで下がり、河口堰の貯水率も44.9%と過去最低を記録した。 |

## 岡森堰国境ものがたり

直方市で遠賀川に合流する彦山川。その合流地点から3キロさかのぼったところに岡森堰はあります。今ではゲートが開閉できる近代的な可動堰となっていますが、江戸時代には石井出という名そのままの小さな堰でした。しかしその小さな堰は「長い長い物語」を現在の人々に残したのです。

ここから下流の下境・木屋瀬・感田・頓野・楠橋の村々は川のそばにあるにもかかわらず水の便が悪く満足に収穫することができませんでした。このため感田村の大庄屋・渡辺善吉は堰を築いて水を引こうと決心しました。

善吉たちはたくさんの杭を立て、周囲から運んできた石を並べるという方法で堰を造り始め、何度か水に流されながら6年の歳月をかけて完成させました。

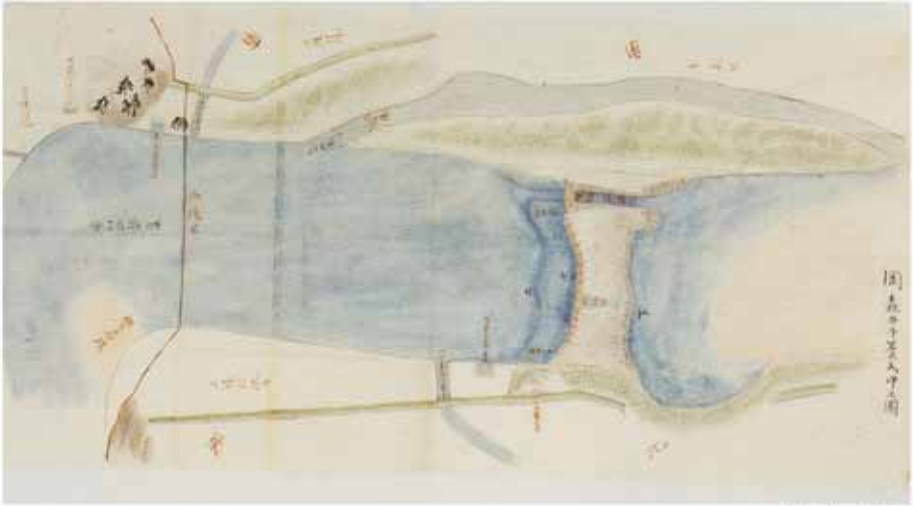
ところが、困ったことが起きました。下流の人にとって素晴らしい堰も、上流の村の人にとっては迷惑なものだったのです。水がせき止められると水害の原因になりますし船も通れないからです。しかも岡森堰のあたりは筑前と豊前の国境なのです。上流の草場村や市津村などは豊前国というのですからこの対立は面倒なものになりました。

この問題は農民だけでは話がつかず筑前と豊前双方の役人が間に入って解決しました。船通しを掘り下げること、毎年「仕向米」といって、筑前の村々から豊前の村々へ270俵のお米を渡すことなどが決められたからです。

しかし、この後も堰や用水をめぐって筑前と豊前の対立は続き、昭和40年に岡森用水組合ができてようやく終わったといいます。岡森堰ができたのが明和9年(1772)ですから、200年近くも争っていたことになります。これほど長い物語がほかにあるでしょうか。

岡森堰の近くには渡辺善吉を讃える石碑が建てられています。今、善吉が生きていたら上流もなく下流もなく水を分け合っている様子に満足してくれることでしょう。

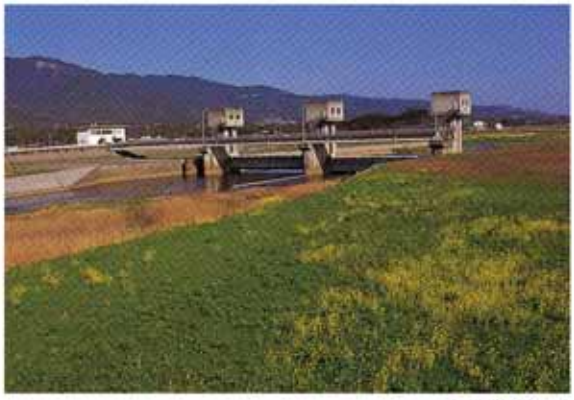
岡森堰関連文書



江戸期の岡森堰

改修前の岡森堰

渡辺善吉の碑



現在の岡森堰

## 河口堰・ダム
## 新しい時代を担って

「河口堰がなかりせば平成６年も大変だったでしょうね」。長く北九州市の水道事業に携わってこられた清本隆敏助役に遠賀川と北九州市の関わりについてうかがいました。

北九州市・清本隆敏助役

「昭和38年に旧５市が合併してから都市化の進展と生活水準の向上により水需要は増加の一途をたどっていました。
その矢先、昭和42年、43年と２年連続して異常渇水があり、給水制限を余儀なくされたんです。以来、本市の重要課題のひとつとして水源開発を進めてきたわけです。

ご存じの通り北九州市には紫川以外に川らしい川がないんです。ですから昭和44年に遠賀川の河口堰が計画されたときは“水源開発の最後の切り札”として一日も早い完成を願いました。飲料水をまかなうだけでなく工業用水によって産業経済の発展にもつながるものですから」。

河口堰は昭和55年に本体工事が終了。昭和58年には本城浄水場が完成して取水が開始されました。

「私は本城浄水場の設計から建設まで手がけましたし、実際に水が飲めるようにして運転の担当者に渡しましたから完成したときは“これで北九州市の水は大丈夫”と感激を覚えました。

現在、上水用と工業用を合わせて100万m³近い供給能力を持っていますが、このうち上水用は66%、工業用は100%遠賀川の水です。遠賀川がくしゃみをすると北九州市は風邪をひくといった感じですね（笑）。

昭和53年には、42年以降の水源開発の努力もあって60万９千m³の供給能力を持っていたんですが、異常渇水ということで170日にも及ぶ給水制限をせざるをえなかった。それが、明治以降の三大異常渇水に数えられる平成６年の場合は河口堰があったためにしのぐことができたんです。水源開発というものは長期的な展望に立って取り組む必要がありますね」。

遠賀川流域の地形を説明するときに、よく「フライパンの底」という言い方がされますが、これは「周囲をなだらかな山に囲まれた広い平野だ」という意味です。なだらかな山ですと大きなダムは造りにくいものです。

遠賀川流域には北九州市の水源のひとつである力丸ダムをはじめ陣屋ダム、久保白ダムなど多くのダムが造られていますが膨大な水需要に応えるにはやや規模が小さいということになります。こうした地形上の条件を考えると河口堰は「平地のダム」として非常に大きな役割を果していることがわかります。

遠賀川河口堰

河口堰第４期工事（昭和53年５月）

力丸ダム

稚魚の放流（嘉穂町）

## 鮭が帰るところ

鮭は川の匂いを覚えていて帰ってくるといいます。春、生まれた小さい命はやがて川を下り海へ出ます。海は冷たい北の海。その海を３年から４年かけてめぐり、やがて帰ってくるのか懐かしい匂いのする故郷の川です。

鮭たちはその上流へとさかのぼっていきます。淵で体を休めては多くの井堰を越え、生まれた場所に戻ったとき鮭は疲れ果てています。しかし、それでも川をさかのぼるのは産卵をするためです。

江戸時代の越後の文人で『北越雪譜』を書いた鈴木牧之は鮭の産卵について「その女魚に男魚 随ひてのぼるは子の為に女魚を助くるならん。これも又人の心にことならず」と書いています。鮭は産卵のためオスがメスを助けながら川をのぼるが、その心は人の心と変わらないものだ、と言うのです。

遠賀川上流、嘉穂町では鮭の稚魚の放流が毎年３月に行われます。色とりどりのバケツを持った小学生たちが稚魚を放してやると、思い思いの方向へ泳ぎながら水面にさざ波をつくります。「大きくなって帰ってこいよ」という声を背に受けて稚魚たちの長い旅が始まるのです。

放流する子供と稚魚

# 鮭がのぼり、人が憩う遠賀川の明日

## 遠賀川・鮭の川

「昭和53年に遠賀川で鮭が見つかったときは驚きましたね。父が鮭神社の氏子代表で“そろそろ鮭様はお戻りになる”なんて言ってたんですけど、どうせ古い言い伝えだからと思ってましたし、第一九州には鮭の遡上はない、と習ってましたからね。

ただ、献鮭祭で鮭のかわりにダイコンをたて割りにしたものを使っても、千年続いたしきたりだけは守っていきたいという気持ちはあった。それが本当に見つかったんですから、まわりの人に鮭について聞き始めましたよ。そうすると“鮭を運んだ”といった話がどんどん出てきたんです」。

嘉穂町大隈で酒造業を営む大里叶さんは鮭が発見されたときの思い出をこんなふうに話してくださいました。それから大里さんは「遠賀川に鮭を呼び戻す会」をつくって、毎年のように3月になると鮭の稚魚の放流を行ってきました。

「昭和初期から炭鉱の最盛期の30年代までは遠賀川は黒い川なんて呼ばれましてね。小学生が絵をかくと真っ黒に塗ったりしたんです。もっとも私どもの川は上流に炭鉱が無かったので、ずっときれいだったんですよ。そのへんは非常に対照的でしたね。

それが炭鉱が閉山になってくると、下流のほうの川もきれいになってくる。そこへ鮭は戻ってきた。それなら、忘れかけていた鮭ののぼる川をよみがえらせてみようと思ったんです。

いろいろ試行錯誤の末、卵を輸送して孵化させることに成功したんです。それだけ苦労して育てた稚魚を放すときはかわいそうな気にもなりますが、このくらいのことに耐えられなければ海などでの試練に耐えられるはずがない、とも思う。複雑な気持ちですね。

鮭を放流することで子供たちには“川を汚しちゃいけない”というよりも“汚したくなくなる”気持ちを持ってもらいたいんです。

大里叶さん

人との関わりが昔から深い遠賀川ですから、鮭の帰ってきやすい川づくり、つまり、人は水を使う、そのかわりに自然に対してお返しもしてあげる、ということで最新の技術を活かした川づくりをしたらいいのではないかと思いますね」。

鮭にとって遠賀川が帰ってくるのにふさわしい川か、というとまだまだ問題があるのは確かです。そのひとつに遠賀川の堰の多さが挙げられるでしょう。自然の状態でのぼるのさえ鮭にとっては試練ですから堰があっては川をさかのぼっていくのは難しいのです。

そこで、遠賀川にたくさんある堰に魚道を設けることが検討され実施されるようになったのです。例えば、稲築町で改築中の白門堰ではアイスハーバー型の魚道を設けることにしています。これは、休める場所がたくさんあるため魚が大変のぼりやすい構造なのです。

彦山川に接する大任町に造られている伊田堰でも魚がのぼりやすい魚道が設けられたうえに、河床にある岩を利用して自然に近い景観を創りだすということが行われています。

このような堰が増えれば鮭も上流へとのぼっていくことができるようになるでしょう。しかし、これだけでは充分ではありません。何よりも流域の人々に川を大切にするという気持ちがないことには本当にきれいな川は生まれないのではないでしょうか。

アイスハーバー型魚道（新町床固）

## 川を大切にする心

水際に沈む白いナイロン袋や河川敷にころがるあき缶。遠賀川沿いを歩いていると、ときどき目にする風景です。

こんなゴミがある限り本当に美しい川はできない、誰かが何とかしてくれる、というのではなくて自分たち１人ひとりが頑張らなければ…。そんな気持ちを行動で表した人々がいます。飯塚市の窪山邦彦さんはその１人。「I LOVE 遠賀川」のメンバーです。

窪山邦彦さん

「最初は、飯塚市主催のシンポジウムに出席された大学の先生が“街なかを川が流れ、菜の花が咲いている風景は素晴らしい。でも、橋のたもとにあき缶がある。あれをみんなで片づけませんか”と提唱されたのに対して、今の実行委員のメンバーが共鳴したのがきっかけなんです。昭和63年でしたね。

私は行政マンですが、会社員や商店主など、さまざまな職業の人がボランティアで委員会をつくって“川をきれいにしよう”ということで呼びかけたら、徳前大橋から飯塚大橋までの清掃に1000人もお見えになって…。これが第１回です。第２回は雨だったにもかかわらず1500人も集まってビックリしました。

こんな具合で、毎回広がってきましてね。野立てをする、遠賀川の水でミニ水族館をつくるというように協力してくださる方が増えている。単なるクリーンキャンペーンではなく地域のコミュニケーションの場になってきている。皆さん楽しんで参加してくれますね。私たちもピクニック気分です。

こうした運動の成果かどうか、最近はジョギングしながらゴミを拾ってくれる人を見かけます。義務的じゃなく川をきれいにしようという機運が高まってるんです。いつかは遠賀川流域の市町村全部に参加してもらいたい。これが夢ですね」。

こうした運動が広がる遠賀川ですが、最近は周辺の都市化が進み生活排水が水質汚染の大きな原因になっています。炊事や洗濯、入浴に使った水が川を汚しているのです。これを防ぐには下水道の整備なども重要ですが、家庭ごとに注意すること、例えば、油は流さない、米のとぎ汁は庭木にやる、というような小さいことがとても大切なのです。

遠賀川工事事務所でも飯塚市に建花寺川浄化施設という水をきれいにする施設を建設しました。これは「礫間接触酸化法」といって、たくさんの石の間に汚れた水を通し、バクテリアに汚染物質を分解させることできれいな水に変える方法です。直方市にも同じ仕組みを持った居立川浄化施設が建設されています。

水は海から蒸発して雲となり、山に降り注ぎ、川となって流れ、大地と人を潤しながら再び海に注ぎます。この自然の大きな仕組みの中に遠賀川の流れがありその水があって生活ができ、作物が育ち、さまざまな製品を作ることができる。このことを１人ひとりが忘れずにいれば、大切な財産である美しく豊かな自然を次の時代の人々に引き継いでいくことができるのではないでしょうか。

美しい河川敷

河川敷のポピー

I LOVE 遠賀川

## 水辺をより楽しい空間に

遠賀川流域はもともと水にまつわる祭が多いことで知られていますが、最近では川をきれいにするとともに、より楽しい空間にしようということで新しい祭や催しが行われるようになりました。

飯塚市の川下り。思い思いの舟やイカダで川を下ります。

直方市の「炎のまつり」。夏の夜、遠賀川の河川敷で行われる祭は炎の名にふさわしく１万本のキャンドルやレーザー光線が夜空を照らします。

舟は人を運び、人は水に触れ、水は炎を映し、人は心を揺らす。こうして川は人の心を自由にします。

川はこうした祭や催しがないときでも人の心をいきいきとさせてくれます。川には河川敷があり、流れの上には広い空があり、緑があり、生き物が住んでいます。水辺に来るだけで川は人にさまざまなものをくれるのです。

桜堤。サイクリングロード。リバーサイドパーク。水辺につくられている施設も川の恵みをいい形で引き出そうとするものです。

水をきれいにするとともに、水辺をより楽しい場にする試みが流域のさまざまな人々によって進められています。

川下り（飯塚市）

おんがふれあい釣り大会

リバーサイドパーク（直方市）

桜

炎の祭（直方市）

どんこ祭（田川市）

花火大会（芦屋町）

サイクリングロード

# 夢、咲かせる川づくり50年

遠賀川工事事務所

## 遠賀川工事事務所・その50年

昭和20年、石炭採掘によって荒れ果てていた遠賀川をよみがえらせるために生まれたのが遠賀川工事事務所です。

それから50年。その間には、昭和28年の大洪水をはじめ多くの試練があり、それに多くの人が立ち向かってきました。特に鉱害という石炭産業が残した負の遺産については、少しずつ、しかし確実に無くしてきました。そして今、清冽という言葉にふさわしい美しい流れと豊かな自然を持った川、川らしい川に触れてみたい、という流域の多くの人々の願いに応えて新しい川づくりに取り組んでいます。

これからの50年、さらに100年。その長い時間の中で語り継がれるような川を創りたい。そうした思いを胸に遠賀川工事事務所は歩み続けます。

### 遠賀川工事事務所その沿革

明治39年 内務省大阪土木出張所を現在の飯塚市に置き第一期改修工事に着手。
明治44年 内務省下関土木出張所の所属となる。
大正８年 第一期改修工事完了。その後は県の管理下となる。
昭和20年 昭和10年、16年の大洪水発生のため、再び直轄河川として再開。内務省下関土木出張所遠賀川修補事務所を飯塚市に設置。
第二期改修工事開始。
昭和23年 事務所を直方市に移転。
昭和23年 事務所名を建設省九州地方建設局遠賀川工事事務所に改名。
昭和41年 遠賀川水系１級河川に指定される。
昭和41年 遠賀川水系工事実施基本計画策定（基本高水流量3,700㎥／s）。
昭和49年 遠賀川水系工事実施基本計画第１回改定（基本高水流量4,800㎥／s）。
昭和63年 遠賀川水系工事実施基本計画第２回改定（計画横断形、堤防高の部分改定）。現在に至る。

# 春

## ながき日や一とせは只夢ながら

諸九尼（筑前直方市）

春になり暖かくなるにつれて感じられる昼の長さ。
しかし、この春は去年の春ではない。
春の日の長さと一年の短さよ。

菜の花

遠賀川源流

河守神社の桜

桜堤（飯塚市）

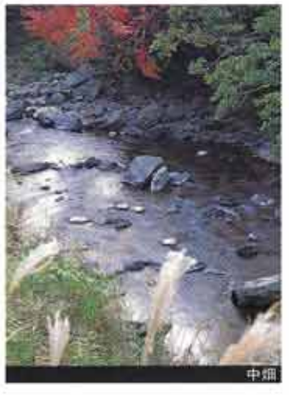
## 遠賀野の枯色いそぐ芦を刈る

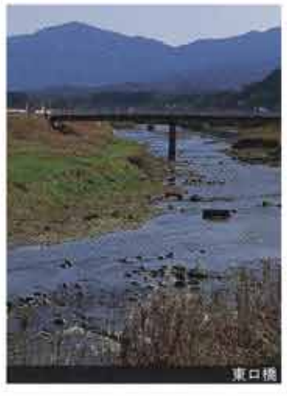
向野楠葉（遠賀郡）

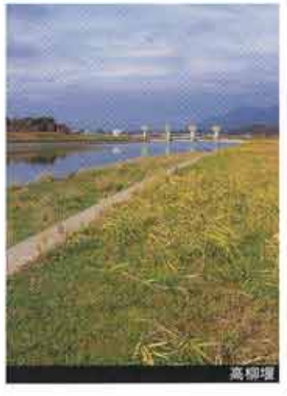
晩秋。遠賀川の河畔に枯れかけた芦を刈る。
芦は簾（すだれ）に編まれ、屋根に葺（ふ）かれて、
暮らしを支えていた。いにしえの事、思い出話。

中島橋上流

白門堰とアイスハーバー型魚道


中畑


東口橋


高柳堰

# 秋



# 夏

## 英彦山のふところ深き岩清水

伊藤鼎白（英彦山）

緑濃き英彦山にその泉は湧きいで、
音はかそけく夏の陽にきらめく。
こんこんとただこんこんと。

リバーサイドパーク

河口堰河川敷

経塚橋

井戸前橋上流

## 遠く航（ゆ）く船を見ていて日脚（ひあし）伸ぶ

兒玉南草（雷瀧）

遠く雷瀧をゆく船を見るともなく見ているうち
日が伸びているのに気がついた。
晩い冬、北風の中、春近し。

建花寺川浄化施設

川津河川公園

川津河川公園

筑豊本線鉄道橋

野鳥（伊方橋下流）

遠賀川と彦山川の合流地点

# 冬

# 遠賀川と戦後50年

| | |
|---|---|
| 昭和20年 | 終戦。マッカーサーを頂点とする連合軍の支配が始まる。<br>第二期改修工事着手(遠賀川修補事務所設置) |
| 昭和21年 | 東京裁判開廷。「リンゴの歌」が流行。 |
| 昭和22年 | 社会党首班連立内閣成立。「鐘の鳴る丘」放送開始。<br>賠償金制度による鉱害復旧事業開始。 |
| 昭和23年 | 帝銀事件。冷戦を象徴する「鉄のカーテン」が流行語に。<br>遠賀川工事事務所に改名。飯塚市より直方市に移転。 |
| 昭和24年 | 下山事件、三鷹事件起こる。映画「青い山脈」公開。<br>遠賀川改修全体計画策定。 |
| 昭和25年 | 朝鮮戦争勃発。レッドパージ。特需景気。<br>黒川直轄編入 |
| 昭和26年 | 対日講和条約調印。日米安全保証条約調印。 |
| 昭和27年 | 6(星号)大島に墜落。NHK「君の名は」を放送。<br>臨時石炭鉱業復旧法制定。 |
| 昭和28年 | 吉田内閣がバカヤロー解散。街頭テレビが人気に。<br>6月戦後最大の洪水(植木堤防破堤)。 |
| 昭和29年 | 自衛隊発足。洗濯機・冷蔵庫・掃除機「三種の神器」に。<br>総体計画採択。 |
| 昭和30年 | 神武景気。石原慎太郎「太陽の季節」を発表。 |
| 昭和31年 | 経済白書の「もはや戦後ではない」が流行語に。<br>綾川放水路完成。 |
| 昭和32年 | なべ底不況。ソ連、スプートニク打ち上げに成功。<br>蔵田水門完成。 |

| | |
|---|---|
| 昭和33年 | ミッチーブーム。1万円札発行。ロカビリー流行。<br>水洗炭業取締条例制定。 |
| 昭和34年 | 岩戸景気。皇太子ご成婚パレード。テレビ売行き急増。 |
| 昭和35年 | 国民所得倍増計画決定。ダッコちゃん人形流行。<br>中元寺川河床陥没事故。 |
| 昭和36年 | ガガーリン少佐。地球一周有人飛行に成功。 |
| 昭和37年 | 若戸大橋開通。堀江謙一小型ヨットで太平洋横断に成功。<br>彦山川、田川市周辺を重点的に施工する。 |
| 昭和38年 | ケネディ大統領暗殺。三井三川で炭塵爆発事故発生。<br>改定総体計画の策定。彦山川・穂波川等で一部改修完成。 |
| 昭和39年 | 東京オリンピック開催。東海道新幹線開業。<br>本川、小竹・飯塚・稲築・大隈地区を施工。 |
| 昭和40年 | 「公害」が流行語に。エレキギターブーム。<br>本川は嵩上げ等で69650㎡を築堤。浚渫、護岸等も継続実施。 |
| 昭和41年 | 一級河川に指定される。本川では在来堤防の嵩上げ等で73600㎡を築堤。他に河床低下防止の床固、護岸、浚渫等を実施。 |
| 昭和42年 | 碓井町や芦屋町の特殊堤を施工。鴨生の10000㎡、頃田町の15000㎡、直方市の12000㎡など築堤施工が進む。 |
| 昭和43年 | 明治100年。「昭和元禄」が流行語に。三億円強奪事件。<br>新御徳機・東口橋完成。中間市低水護岸施工320m(災害合併)。 |
| 昭和44年 | 米アポロ11号、月面着陸に成功。東名高速全通。<br>飯塚市築堤10000㎡(鉱害復旧と合併)。穂波川築堤32000㎡。 |
| 昭和45年 | 日本万国博覧会。歩行者天国。三島由紀夫、自衛隊乱入。<br>下益橋完成。鯰田築堤490m。笹尾川掘削8000㎡。 |

| | |
|---|---|
| 昭和46年 | ドルショック。Tシャツとジーパンが大流行。<br>田中橋完成。小野牟田橋完成。彦山川下境築堤370m。<br>蔵田排水機場完成。 |
| 昭和47年 | 沖縄県発足。日中共同声明に調印。浅間山荘事件。<br>上西郷下益築堤護岸1600m。感田築堤530m、低水護岸170m。 |
| 昭和48年 | オイルショック。「省エネ」が流行語に。<br>上山田鉄橋架替完成。 |
| 昭和49年 | 小野田寛郎元少尉ルバング島より帰国。長島茂雄引退。<br>工事実施基本計画改定。 |
| 昭和50年 | 沖縄国際海洋博覧会開催。<br>花ノ木堰、可動堰に改築。水質汚濁防止連絡協議会設立。<br>曲川排水機場完成。 |
| 昭和51年 | ロッキード事件。「ピーナッツ」が流行語に。<br>西川の直轄編入。碓井、井戸前橋完成。川島排水樋管1ケ所。<br>鯰田・藤野川排水機場完成。 |
| 昭和52年 | 日航機、赤軍派にハイジャックされる。<br>飯塚市、目尾護岸235m1567㎡。知古護岸225m、2020㎡。 |
| 昭和53年 | 成田空港開港。<br>異常渇水で田川市・香春町・水巻町等が給水制限を受ける。 |
| 昭和54年 | 第2次オイルショック。「ウサギ小屋」が流行語に。<br>6月に大洪水。 |
| 昭和55年 | モスクワオリンピック不参加。校内暴力などが急増。<br>遠賀川河口堰、本体完成。<br>学頭・曲の手・前川各排水機場完成。 |
| 昭和56年 | 福井謙一教授ノーベル化学賞受賞。中国残留日本人初来日。 |
| 昭和57年 | DC-8型機が羽田空港着陸寸前に墜落。<br>東北新幹線開業。<br>山鹿排水機場完成。 |
| 昭和58年 | 日本海中部地震。おしんブーム。<br>岡森堰改築。高柳堰改築。 |

| | |
|---|---|
| 昭和59年 | かい人21面相事件。投資ジャーナル事件。 |
| 昭和60年 | 科学万博開催。日航機、群馬県御巣鷹山山中に墜落。<br>6月洪水、倒壊・浸水による家屋被害が発生。<br>笹尾川排水機場完成。 |
| 昭和61年 | 伊豆大島三原山が噴火。都心の地価高騰。<br>川端排水機場完成。 |
| 昭和62年 | 利根川進教授にノーベル医学・生理学賞。<br>橋堰改築。 |
| 昭和63年 | 青函トンネル開業。瀬戸大橋開通。なだしお事件。 |
| 昭和64年 | 昭和天皇死去。消費税スタート。礼宮婚約発表。 |
| 平成元年 | 昭和ブーム。手塚治虫死去。美空ひばり死去。<br>殿浦排水機場完成。 |
| 平成2年 | 台風19号が本州縦断。天皇即位の礼。ドイツ統一。 |
| 平成3年 | 湾岸戦争勃発。ソ連邦消滅。雲仙普賢岳噴火。<br>一本木堰改築。7月洪水、内水被害発生。 |
| 平成4年 | 毛利衛さん宇宙へ。バルセロナ五輪で岩崎恭子金メダル。<br>建花寺川浄化施設完成。 |
| 平成5年 | 皇太子ご成婚。細川内閣成立。「清貧」が流行語に。 |
| 平成6年 | 自社さ連立内閣発足。大江健三郎ノーベル文学賞受賞。<br>異常渇水。流域の11市町で時間断水が実施される。<br>庄司川排水機場完成。 |
| 平成7年 | 阪神大震災。地下鉄サリン事件。<br>白門堰・釜の口堰・伊田堰改築中。居立川浄化施設建設中。<br>7月洪水。 |

# “山遠く、地平らかに、土肥えて穀ゆたかなり”
# 大河あり。遠賀川、未来へ。

青き山。緑の沃野…。『筑前国続風土記』は、ゆたかな実りをもたらす遠賀川の土を讃えています。しかし、水は土を運ぶだけでなく、水害という災いも運びます。古来より人はそんな水と闘い、あるいはなだめ、その時々の暮らしをつくりあげてきました。

田に水を引くために多くの井堰を拵える。舟で人や物を運ぶ。舟の通る道をつくる。そして水に神を見て祭り、川が暮らしのなかに溶け込む。そんな時が長く続きました。

しかし、その水に対する畏れ（おそ）ばかりか関心さえも抱かずに過ごした時も人にはありました。そんな人の心を映したのが黒い川です。

その黒い川が姿を消し人の心にもゆとりが生まれて、川は人とともに新しい時代を迎えようとしています。人と川が最も自然なかたちで溶け合う未来。大河・遠賀川はそこに向かって流れ続けているのです。


遠賀川ものがたり
遠賀川工事事務所50周年記念誌

平成7年10月発行

■

**取材協力**
（順不同・敬称略）

香月靖晴　日本民俗学会
佐々木武彦　中間市立歴史民俗資料館
長弘雄次　九州共立大学

桃田武/伊藤英子/清本隆敏/大里叶/窪山邦彦

■

**資料提供**

松尾昌英　黒崎郷土史会

■

**写真協力**
（順不同・敬称略）

飯塚市/遠賀町/嘉穂町/直方市/中間市/須藤文征/岡森用水組合/福岡市博物館/等持院/高大寺/平凡社フォトライブラリー/共同通信社/時事通信社/西日本新聞社/サンテレフォト

■

**企画・監修**

建設省九州地方建設局遠賀川工事事務所
〒822　福岡県直方市溝堀1－1
TEL（09492）2－1830
記念誌企画担当 ―― 桑野修司
秀徳典棲
河崎信子

■

**企画・制作**

ニッセイエブロ株式会社
〒105　東京都港区西新橋2－5－10
TEL　03(3501)5151
取材・文 ―― 白川昌彦
デザイン ―― 佐藤　弘
撮影 ―― 松村和男


■

**主要参考文献**
（順不同）


「遠賀川・流域の文化誌」香月靖晴（海鳥社）
「遠賀川流域史探訪」林正登（葦書房）
「貝原益軒全集」貝原益軒（国書刊行会）
「ふるさと土木史」財団法人・経済調査会
「遠賀川と人々の暮らし」遠賀川工事事務所
「遠賀川・美しく豊かなふるさとの川」遠賀川工事事務所
「岡森堰～その二百年の歴史」VTR遠賀川工事事務所
「遠賀川・人と自然」VTR遠賀川工事事務所
「中間市史」中間市/「遠賀町誌」遠賀町/「芦屋町誌」芦屋町/「稲築町誌」稲築町/「飯塚市誌」飯塚市
「地図と絵で見る飯塚地方誌」飯塚地方誌編纂委員会（元野木書店）
「修験の山・英彦山」田川市石炭資料館
「田川市石炭資料館」田川市石炭資料館
「中間市立歴史民俗資料館」中間市立歴史民俗資料館
「芦屋・郷土史を歩く」芦屋町歴史民俗資料館
「古絵図・写真にみるいいづか」飯塚市歴史資料館
「川の文化」北見俊夫（日本書籍）
「鮭の文化誌」秋庭鉄之（北海道新聞社）
「心棒ひとすじ・嘉穂劇場とともに」鋼野陽一（西日本新聞社）
「九州沖縄ふるさと大辞典」財団法人角川文化振興財団
「国史大事典」（吉川弘文館）
「筑前の長崎街道」松尾昌英（みき書房）

遠賀川の
シンボルマーク

建設省九州地方建設局
遠賀川工事事務所
〒822 福岡県直方市溝堀1丁目1-1
TEL(09492)2-1830 FAX(09492)2-2859